

研究ノート

プロフェッション理論の展開

— 会計プロフェッションの場合 —

平 野 由 美 子

目 次

はじめに
第一章 プロフェッションについて
第一節 プロフェッションとは
第二節 会計プロフェッション
第二章 プロフェッション理論の展開
第一節 職業社会学におけるプロフェッション研究
第二節 会計プロフェSSIONナリゼーションに関する先行研究
おわりに

は じ め に

プロフェッションは高度な専門的知識を有する職業団体である。そして、プロフェッションは互いに知的訓練をするのみならず、組織化し、自らの地位を向上させる試みを続けてきた。職業史の一部として検討されてきたプロフェッションは、1970年代前後、その成立や発展過程について批判的に考察され始める。会計プロフェッションについても例外ではない。

本稿では、会計分野でのプロフェSSIONナリゼーションに関する既存の研究をサーベイすることを目的としている。そのためにプロフェッションとは何か、プロフェッションが進めるプロフェSSIONナリゼーションとは何かを説明し、職業社会学の分野で展開されたプロフェSSION研究を、会計分野に当てはめて分析している先行研究を紹介したい。

第一章 プロフェッションについて

第一節 プロフェッションとは

本稿で取り上げるのは「会計プロフェッション」である。現在の日本で会計プロフェSSIONといえば、日本公認会計士協会に登録されている公認会計士を指すと考えられている(八田, 2004, 6頁)。そこで、公認会計士がプロフェッションとして認められる所以を突き詰めようとすると、「プロフェッション」が何かを示しておく必要がある。まずはプロフェッションをはじめ、本稿で使用していく用語を整理することから始めたい。

(1) 語源

プロフェッション(profession)という言葉は、プロフェス(profess)という単語から生まれた(八田, 2004, 6頁)。プロフェスは神に宣誓するという意味があり、中世ヨーロッパではキリスト

教文化の下、「社会の利益（公共の利益）に貢献するというを神の前に誓う行為こそがプロフェスであり、それを行って初めて社会的に認知された職業人になれるとされていた」（八田，2004，6-7 頁）。ここから、「公共の利益を守るような職務に携わる人々，あるいはそういった職業群をもって自然発生的にプロフェッションと呼ぶようになった」（八田，2004，7 頁）という。

しかし，このプロフェッションという言葉の和訳は一律ではない。例えば，八田（2004）は専門職業という日本語を使用している。専門職業や専門職という日本語からは，公認会計士などのように資格を持った人々を指しているように思われるが，「英語圏社会で使われるプロフェッションという用語は，……専門職，あるいは専門職に関わることのできる人々，こういった集団を指してプロフェッションと呼んでいる」（八田，2004，6 頁）。つまり，資格を保有する者のみがプロフェッションではなく，ある条件を充たしていればプロフェッションとして周知されているのである。さらに『新社会学辞典』では，専門的職業（professional occupation）とは「高度に体系的な知識と訓練を基礎に，社会の中心的な価値に関する問題に対して，有償で依頼人にサービスや助言を提供するサービス職業のこと」（2002，901 頁）であり，「専門的職業か否かという判断はあくまでも相対的なもので，はっきりとした境界があるわけではない」（2002，902 頁）とも記されている。プロフェッションの定義のあいまいさは，資格の有無といった客観的な判断基準だけではなく，それ以外の一見して判断つきにくい基準も含まれるというプロフェッションの性格にある。

(2) プロフェッションとプロフェッショナル

専門的職業か否かが相対的な判断しかできないことから，研究者によってプロフェッションの定義は様々である。多数の研究者によるプロフェッションの定義に含まれる基礎要件をまとめた研究として Millerson（1964）や竹内（1971）が挙げられるが，ここでは石村（1969）が示した仮の定義で表現しておく。「プロフェッションとは，学識（科学または高度の知識）に裏づけられ，それ自身一定の基礎理論をもった特殊な技能を，特殊な教育または訓練によって習得し，それに基づいて，不特定多数の市民の中から任意に呈示された個々の依頼者の具体的要求に応じて，具体的奉仕活動をおこない，よって社会全体の利益のために尽す職業である」（石村，1969，25-26 頁）。なお，プロフェッションという語は「単に特定の職業領域を意味するにとどまらず，集団としての実体を表している」（長尾，1995，47 頁）のに対し，プロフェッショナルという語は「かかる職業領域における従事者たる諸個人」（長尾，1995，47 頁）を指す。

(3) スペシャリストとの違い

一般的にはプロフェッショナルとスペシャリストという言葉は，混同して使用されやすい。スペシャリストとは「一般に，1つの対象または1つの部門に自己の活動を限定している人」（石

村, 1969, 4 頁) のことであり, 「いかなる職業にせよ, 職業に従事している人 (職業をもっている人) は誰でも, 自分の仕事を一定の領域に限定せしめているという意味で, またそれぞれの領域でのエキスパートという意味で, すべてスペシャリストである」(石村, 1969, 5 頁)。医業の例では, 医師はプロフェッションであるが, 内科医や外科医は医業の中でもそれぞれに特化して従事しているスペシャリストである(石村, 1969, 5 頁)。但し, スペシャリストは同時にプロフェッションであるかといえばそうではない。餅屋は餅のスペシャリストであるが, プロフェッションとは言いがたい(石村, 1969, 5-7 頁)。

(4) プロフェッショナルリゼーション

プロフェッショナルリゼーション (professionalization) という言葉についても整理しておこう。前述の餅屋のように「単にひとつの仕事に巧みになる」(石村, 1969, 102 頁) ことは「専門化 (specialization)」という。これに対し, 医師のようなプロフェッションが内科や外科等の専門医になることは, 医業の「専門分化 (differentiation)」である。

プロフェッショナルリゼーションとは, 「プロフェッションになる専門職化」(石村, 1969, 102 頁) のことであり, 専門化や専門分化とは別の意味である。加えて, 専門職化とはある職業がプロフェッションに成っていくプロセスや現象を指している(石村, 1969, 21 頁)。但し, このプロセスは「一定の職業領域が新しく成立し, あるいは既存の領域から分化したとしても, それが当初より一つのプロフェッションとして社会的承認をえられるものではなく, そのためには時間の経過と種々の努力を必要とする」(長尾, 1995, 56 頁) のであり, 職業や国, 時代が異なればプロフェッショナルリゼーションについての説明は当然異なったものとなるであろう。

本節では, これから使用していく用語について本稿における意味を整理してきた。しかし, これらの語は研究者によっては区別せずに使用されている場合も多い。例えば, プロフェッションとプロフェッショナルの用語の使い方である。先行研究をサーベイするにあたって, 特に海外文献は既存の研究者がこれらの語を使用したとおりに, 本稿の中では和訳している場合がある。

第二節 会計プロフェッション

「会計士が高い社会的地位をもつプロフェッションであることは広く認知されている」(West, 1996, pp.11-12)。それは周知のとおり, 「会計が社会や経済において重要な役割を果たし……, 会計実務が社会や経済を豊かにしてきた」(Willmott, 1986, p.234) という歴史的な流れから見解づけられたといえる。Wilensky (1964) によれば, 1917 年に職業倫理規程が定められたことにより, アメリカ会計士のプロフェッショナルリゼーションは確立されたと位置付け

ている¹⁾。また、わが国においては、『公認会計士法』第 1 条にて「公認会計士は、監査及び会計の専門家」であり、その使命が「国民経済の健全な発展に寄与すること」と明文化されている。以上のことから、会計士が会計プロフェッションであることについて、ほぼ異論はないと考えてよいだろう。

さらに八田 (2004) では、会計士がプロフェッションの特質を備えているかについて言及されている。1960 年から 70 年代、職業社会学の領域においてさまざまな職業がプロフェッションか否かについて議論された。そのような中で、アメリカ公認会計士協会 (American Institute of Certified Public Accountants: AICPA) 等が、7 つの特質 (表 1-1) をもった者がプロフェッションであるという考え方を早い段階から取り入れたことを紹介している。そして、その 7 つの特質すべてに該当するとして、会計士はプロフェッションに属すると結論づけられている (八田, 2004, 9-11 頁)。

表 1-1: プロフェッションの特質

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 専門的知識があること 2. 正式な教育課程を備えていること 3. プロフェッションの団体への入会に関する基準があること 4. 職業倫理規程があること 5. 免許状もしくは特別な称号によってその地位が認められていること 6. 所属する人々が実施する業務に対して公共の利益が存すること 7. 所属する人々がその社会的責任を認識していること |
|--|

(出所) 八田, 2004, 9 頁。

なお、これから本稿の中で使用していく会計プロフェッションである会計士という用語は、日本の公認会計士 (Certified Public Accountant: CPA) をはじめ、アメリカの公認会計士 (CPA)、イギリスやカナダ、オーストラリアの勅許会計士 (Chartered Accountant: CA)、ドイツの経済監査士などを総称したものを意味する。名称を区別して用いた方が好ましい場合は、個別に表記して進めていくことにしたい。

第二章 プロフェッション理論の展開

本章の第一節で紹介する先行研究は、社会学の中でも職業社会学²⁾と呼ばれる分野をサーベイし、個々のプロフェSSIONナルではなく、集団としてのプロフェSSIONを対象とする。第

1) Wilensky (1964) は 18 種の職業について、アメリカにおけるプロフェSSIONナリゼーションの達成度合いを 4 段階に分けてまとめている。確立 (established)、進行中もしくは不十分 (others in process, some marginal)、新設 (new)、疑わしい (doubtful) という 4 段階で、会計士は確立 (established) に属している。

2) 職業社会学とは、「職業を契機としてくりひろげられる職業従事者の生活次元で、その共同生活の実態を実証的に追求することを通じて、現代社会における職業生活にまつわる諸問題を究明することを課題とする」(『新社会学辞典』, 2002 年, 753 頁) 学問分野である。

一節はプロフェッション全般についてまとめ、会計プロフェッションに特化した先行研究は第二節でまとめる。

第一節 職業社会学におけるプロフェッション研究

後に述べるように、職業社会学におけるプロフェッション研究は会計分野にも大きな影響を及ぼした³⁾。本節では、プロフェッション研究における1970年代頃の転機について確認する。

1970年代以前は、プロフェッションか否かを判別するため、それぞれの職業団体の機能がプロフェッションの特性に当てはまっているかが議論の対象となっていた (West, 1996, p.14)。従って、プロフェッションの機能や特徴に重点が置かれて研究されていた。Willmott (1986) は、これを「機能的アプローチ (The functionalist approach)」と呼んでいる (p.236)。

機能的アプローチでは、専門的知識やスキルがプロフェッションの機能の一つとして挙げられているが、1970年代頃になると、この専門的知識やスキルと「引き換えに、プロフェッショナルが無資格者のような競合者から保護され、高い社会的地位や報酬を得ようとする相互作用的な社会契約という言葉でプロフェッショナリズムは表現されるようになってきた」 (West, 1996, p.14)。つまり、「プロフェッショナルと社会における他の要素とに関係があるという見方は相互作用的な解釈がなされ」 (West, 1996, p.14)、これは「プロフェッショナル団体が公益のためというよりも、利己主義により設立されたのではないかとも考えられるのである」 (West, 1996, p.14)。Willmott (1986) はこのような捉え方を「批判的アプローチ (The critical approach)」と呼んでいる (pp.237-238)。

以下では、職業社会学におけるプロフェッションに関する既存の主な研究を機能的アプローチと批判的アプローチという分類に従って確認していく。

(1) 機能的アプローチ (The functionalist approach)

Parsons (1939) が「社会構造研究を進める上で、プロフェッションは私たちの社会で重要な役割を果たしている」 (Parsons, 1939, p.34) と述べているように、機能的アプローチは社会の中でのプロフェッションの機能や特徴、位置付けに焦点をあてた研究である。このアプローチのもとでは、プロフェッショナルは、職業活動を通じて専門的知識やスキルを発揮し、クライアントに対しては自主裁量が認められるという「近代、現代の社会においていわば最も恵まれた条件の下で活動する職業人として特徴づけられてきた」 (長尾, 1995, 129頁)。一方で、プロフェッショナルは職業活動における「資源や情報の入手の必要のために、あるいはクライアントの大衆化に応じるために、組織体に依拠する」 (長尾, 1995, 129頁) ようになる。そして、

3) 例えば、Willmott (1986) や West (1996) を参照。

そのプロフェッショナルリゼーションについては、利他主義によって実現したと説明されてきた。

ここでは以上のような機能的アプローチを採用した Carr-Saunders and Wilson (1933), Parsons (1939), Millerson (1964) を取り上げ、確認する。

① Carr-Saunders and Wilson (1933)⁴⁾

「Carr-Saunders and Wilson (1933) は、プロフェッションの発展について取り上げた最初の文献」(Edwards, 2000a, p.xlii) とあるように書かれた年代も古く、しかも当時のイギリスにおけるプロフェッション全般について体系的にまとめあげた文献として重要である⁵⁾。

プロフェッションの誕生は、「弁護士や医師は、いうまでもなくそれらがプロフェッションとよばれる以前の時代にも存在していた職種である」(石村, 1969, 52 頁) とあるように古くからの存在は確認されているが、それぞれのプロフェッションがどの国でいつ初めて登場したのかを特定するのは容易ではない。ましてやプロフェッション誕生当初、一律の職業訓練や教育、職業団体というものはなく、プロフェッションによる社会的地位の向上追求といったこともなかった(石村, 1969, 52 頁)。

弁護士や医師のあり方に変化が現れたのは、12, 13 世紀のヨーロッパで繁栄したギルド⁶⁾の登場である(石村, 1969, 52 頁)。聖職者や弁護士、医師、教職者たちは他の職業と同様、プロフェッショナルの初期の団体とも言えるギルドを結成した(Carr-Saunders and Wilson, 1933, p.289)。そして、大学が大きな役割を果たすことになる。「当時の大学の組織はかなりの画一的なものであり、一般に神学(Theology)、法学(Law)、医学(Medicine)の3つの学部から成っていた。これらの課程を終えたものは、あるものは法の、あるものは医術の、専門家であり、それと同時に社会の知識階層に属することになる」(石村, 1969, 52 頁) とあるように、「中世ヨーロッパの大学は、それゆえにプロフェッションのための訓練所であった」(石村, 1969, 53 頁)。かくして、ギルドの登場がプロフェッションと呼ぶべき職業団体を産み出し、大学で

4) Carr-Saunders and Wilson (1933), pp.289-307. 石村(1969)の第3章「歴史の中のプロフェッション」は、Carr-Saunders and Wilson (1933)を参考に書かれたものであるため、ここでは石村(1969)も合わせて参考にする。

5) Carr-Saunders and Wilson (1933)が執筆されたこの時期は、「プロフェッショナルリズムに世間の関心が集まっていた」(Carr-Saunders and Wilson, 1933, p.1)。というのは、プロフェッションの組織化に関連する問題や専門的なサービスの享受方法など多数の問題が発生しており、プロフェッションの登録制度の確立についてまさに議論され始めていたからである。しかし、この当時「プロフェッションに関する情報は圧倒的に不足していた」(Carr-Saunders and Wilson, 1933, p.2)。Carr-Saunders and Wilson (1933)はプロフェッションの持つ技術的な側面よりも、プロフェッションの歴史について言及し、現在の位置付けを分析することを目的として『The Professions』を執筆した。

6) Carr-Saunders and Wilson (1933)は、ギルド、大学、教会との関係についても言及しているが、本稿においては直接に関わりがないため、これらの関係については触れていない。しかし、当時の聖職者がギルドや大学に権力を振るっていたことにより、その後のプロフェッションの発展にも影響を及ぼしたことを否定するものではない。

職業のための専門教育をするという体制づくりにつながった。

Carr-Saunders and Wilson (1933) をはじめ、その後の研究者も指摘しているが、プロフェッションの歴史に触れる上で産業革命は分岐点である。産業革命による科学技術の進歩が「化学者 (chemists), 物理学者 (physicists) を産み出し」(Carr-Saunders and Wilson, 1933, p.297), さらに専門的知識や技術を備えた新しいプロフェッションの誕生につながった (Carr-Saunders and Wilson, 1933, p.297)。新しいプロフェッションの例として、会計士 (accountants)⁷⁾, 書記官 (secretaries), 不動産測量士 (surveyors) などが挙げられる (Carr-Saunders and Wilson, 1933, p.297)。そして、石村 (1969) は新しいプロフェッションと従来からのプロフェッション (聖職者, 弁護士, 医師) とは差異があると指摘している (58 頁)。従来のプロフェッションが「人生や社会の消極面の治癒, 回復を目的としている」(石村, 1969, 58 頁) のに対して, 新しいプロフェッションは「積極的な社会の生産活動 (経済活動) - 創造活動 - に, むすびついたものである」(石村, 1969, 58 頁)。産業革命が人々の社会活動をより活発なものへと導いた結果として, 新しいプロフェッションの登場は必然であったとされる。

② Parsons (1939)

Parsons (1939) は「私たちの社会での多くの重要な局面で, 明らかにプロフェッションの洗練された機能に大きく依存している」(Parsons, 1939, p.34) と説く。ビジネスの繁栄とプロフェッションの台頭との関連性を強調しつつ, Parsons (1939) はプロフェッションについて, 「合理性 (rationality)」や「機能の特殊性 (specificity of function)」, 「普遍性 (universalism)」という 3 つの要素を挙げた。

科学技術のめざましい発展は人々の社会活動を活発にし, 人々の考え方もそれまでの伝統を重んじる考え方 (traditionalism) から合理性の追求へと変えてしまった (Parsons, 1939, pp.36-37)。「科学こそ真実というような (合理的な) 考え方が, 次第に実務においても適用されるようになる」(Parsons, 1939, p.37, 括弧内は筆者挿入)。すなわち, 「ビジネスマンも工場長も弁護士も, 『最善』, 『効率的』な方法で, 彼らの機能を発揮することが求められるようになった」(Parsons, 1939, p.37)。そして, プロフェッションは社会に大きく貢献しており, その合理性がより重要であると強調する (Parsons, 1939, p.37)。というのは, プロフェッションは権力 (authority) を有しているからである (Parsons, 1939, p.38)。例えば, 医師は患者よりも医療知識を有しているので, 患者にとっては医師に診察を受けた方が合理性を追求していることになるが, 医療的な助言について患者は医師に従わざるを得ない。プロフェッションはその

7) Previts and Sheldahl (1977) は, 14 世紀後半には 'countinghouse' や類似語がすでに小説の中に登場すると指摘していることから, 産業革命以前に会計職が全く存在しなかったわけではない。但し, 産業革命以前の会計職は会計専門的知識をもつ会計プロフェッションというよりは, 簿記のスキルといった会計事務に長けた能力をもつ者などの個人的なスペシャリストであった。

専門的知識やスキルの範囲内で自主裁量の権力を持っているのである (Parsons, 1939, p.38)。

「機能の特殊性は現代制度において不可欠な要素であり、機能的で特殊な専門能力はその典型例である」(Parsons, 1939, p.38)。そして、機能の特殊性には管理的な役割もある。つまり、プロフェッションは自分勝手にその能力を発揮することが許されておらず、その職務によって権力の範囲を限定している。特殊な専門能力に基づいて権力を分散させることは「分業」という形態につながっていくことになる。

さらに、プロフェッションとそのクライアントとの関係についても触れている。例えば、医師と患者は「患者が誰かではなく、どこに疾患があるのかで両者の関係が成り立つ」(Parsons, 1939, p.41)。同じ病気の診断結果は、患者が誰であっても同じでなければならない。このような関係を普遍性と呼び、これもプロフェッションの重要な要素としている (Parsons, 1939, pp.41-42)。

③ Millerson (1964)

Millerson (1964) が執筆した当時のイギリスでは、団体として組織化することがプロフェッショナルな地位のシンボルともなっていた (p.ix)。しかし、イングランドとウェールズだけでも約 160 もの団体が存在し、プロフェッションに値する団体とその価値が疑われる団体とが混在している状況にあった (Millerson, 1964, p.ix)。そこで、Millerson (1964) は『資格附与団体』をよりよく理解するために、プロフェッショナリズムについての研究は必要 (p.x) であるとし、プロフェッションの定義の分析から始めている。既述のとおり、プロフェッションの定義を一つに限定することは難しい。Millerson (1964) も同様の指摘をしており、21 人の研究者がプロフェッションの定義にどのような要件を含めてきたのかをまとめている。要件として洗い出されたのは、表 2-1 に掲げる 14 の要件である⁸⁾。

14 の要件はそれぞれプロフェッションの機能や特徴であり、表 2-1 は機能的アプローチによる研究を集約しているといえる。分析結果より、研究者 21 人中、④組織化：13 人、⑤職業行動規則の制定：13 人、①理論的な知識に基づくスキル：12 人となっており、この 3 つの要件がプロフェッションの定義に含まれていることが多い⁹⁾。Millerson (1964) 自身も、プロフェッショナル団体の機能について整理しているが (pp.28-32)、その本来的な機能として組織

8) Millerson (1964) によるプロフェッションの定義についての分析は、竹内 (1971) によってさらに付け加えられ、計 28 名の研究者と 18 の要件でまとめられた。

9) 竹内 (1971) による分析結果では、④組織化：20 人、①理論的な知識に基づくスキル：19 人、②教育訓練：15 人となっているが、ここからも Millerson (1964) による研究の中心となっている組織化をプロフェッションの定義に含めている研究者が多いことは証明されている。

表 2-1：プロフェッションの定義に含まれている要件の分析結果

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14
	理論的な知識に基づくスキル	教育訓練	能力試験	組織化	職業行動規則の制定	利他的なサービス	他人の出来事への適用	必要不可欠な公共サービス	社会が認めたライセンス	クライアントとの明確な関係	クライアントとの信頼関係	最良の公平なサービスの提供	同業者への忠誠	明確な報酬（フィー）
Bowen	○		○	○	○									
Carr-Saunders & Wilson	○	○	○	○	○									○
Christie		○			○		○							
Cogan	○					○	○							
Crew				○	○	○		○						
Drinker	○					○					○		○	
Flexner	○	○		○		○	○							
Greenwood	○	○		○	○				○					
Howitt		○	○		○	○				○				
Kaye	○		○	○	○									
Leigh	○	○												
Lewis & Maude		○	○	○	○						○			
Marshall				○		○								
Milne	○			○	○	○		○						
Parsons				○					○	○				
Ross	○			○	○	○						○		
Simon		○	○		○									
Tawney			○	○	○									
Webbs							○					○		○
Whitehead	○						○							
Wickenden	○	○	○	○	○									

(出所) Millerson, 1964, p.5, Table1.1 ‘Showing an analysis of elements included in various definitions of profession’ を基に筆者作成。

化を挙げている¹⁰⁾。

そして、副次的な機能にステイタスの向上を挙げる¹¹⁾。イギリスにおいて勅許を得ること

10) Millerson (1964) が列挙した他の本来的な機能は、資格付与、研究の促進と情報伝達、能力あるプロフェッショナルの登録、高度な職業行動規程の制定と維持の4つである。

11) 他の副次的な機能として、プロフェッションへの入会規制、プロフェッションと公衆の保護、メンバーの

は同時に高いステイタスにあることを意味するが、勅許は団体に授与されるのが通常であり (Carr-Saunders and Wilson, 1933, p.302), 個人ではなかなか得られないことから、プロフェッショナルが組織化することには意義がある。しかし、ここで注意しておきたいことは、Millerson (1964) によると、ステイタスの向上は副次的な機能にすぎないということである。ステイタスの向上がプロフェッショナル団体の本来的な機能であったのではないかという議論は、後に批判的アプローチで展開されることになる。

(2) 批判的アプローチ (The critical approach)

以上のようなプロフェッション研究は、次第に、集団としてのプロフェッションの活動は専門的知識やスキルと引き換えに、高い社会的地位や報酬などを獲得できる社会的に認められた相互作用に基づくと考えられ (West, 1996, p.14), これを批判的に捉えるならば、「プロフェッショナル団体は公益のためというよりも、私益のために動機づけられているのではないかという可能性について検討されるようになってきたのである」(West, 1996, p.14)。

この理論の転換は、1970年代の時代背景と世論に影響を受けている。一般的教育水準の向上や情報メディアの発達により、プロフェッションの仕事の秘められた部分が暴かれ、職業倫理が有効に働いていないことを露呈した (長尾, 1995, 7頁)。その例に医療不正・医療過誤や伝統的な大学のあり方などの問題があったと長尾 (1995) は挙げている。

① Larson (1977)

「Max Weber が知識やスキルの機能として、市場での報酬を獲得する能力と言及した」(Larson, 1977, p.xvi) ことを受けて、Larson (1977) は知識やスキルと引き換えに得られる社会的地位や経済的報酬という「私益のため」に、専門的職業の市場を構築し、支配しているのではないかと考えた。従って、Larson (1977) のいうプロフェッショナルリゼーションとは「特別なサービスの生産者が、彼らの専門的知識の市場を作り上げて支配するプロセス」(p.xvi, 斜字原文どおり) を指す。プロフェッションは「市場での専門的知識を独占し、階層化システムにおけるステイタスを独占する」(Larson, 1977, p.xvii) ことで、競争の激化による報酬額の伸び悩み分を補うために、組織的な試みとして他との差別化を図り、希少性を保とうとした。この組織的な試みを Larson (1977) はプロフェッショナル・プロジェクト (professional project) と提唱している。

プロフェッショナル・プロジェクトを進めていくために、Larson (1977) がまとめたプロフェッションによって利用される手段や根拠は表 2-2 のとおりである。

ための利害集団としての活動、社会活動の奨励とプロフェッション同士の協力体制、福利厚生 の 5 つを挙げている。

表 2-2: プロフェッショナルの特権を得るための手段や根拠

① 専門職市場の独立

	自律的な手段（根拠）	他律的な手段（根拠）
伝統的手段 （根拠）	上流階級の教育，自由主義的教育 ※インズ・オブ・コートのような団体，超一流 のカレッジ，アカデミック団体あるいは 「伝統的な」大学で制度化された。	上流階級や紳士的な （高い身分に元々備わっている）特徴 ※「上流階級」や「古くからの」 エリートに制度化された。
現代的手段 （根拠）	体系化されたトレーニングや試験 ※プロフェッショナル・スクールや 「現代的な」大学で制度化された。	登録制度，ライセンス ※国家により制度化された。

② 確立された専門職市場への依存

自律的な手段（根拠）	他律的な手段（根拠）
認知された排他主義 ※プロフェッショナル団体，「現代的な」大学 で制度化された。	他の職業と比べて，高い収入と特権 「他のプロフェッショナル」権力との関係 ※国家や企業，大学で制度化された。

（出所）Larson, 1977, p.68, Table1 ‘Means or sources of professional prestige’ を基に筆者作成。

表 2-2 からは，それまで言及されていたプロフェッションの要素である利他主義的な言葉はどこにも見ることができない。もちろん，すべてのプロフェッションにおいて上記の表が当てはまるわけではないとしても，公益のためのプロフェッショナルイゼーションであるという「イデオロギーが，流動的なプロジェクトを進めていく上で，プロフェッションにとっては利用しやすい手段の有効性をごまかしている」（Larson, 1977, p.68）。

Larson (1977) は，機能的アプローチの説明は医師や法律家のような従来からのプロフェッションにはその重要性を見出せるが，従来からのプロフェッションのさらなる発展過程や他の職業のプロフェッショナルイゼーションには現代化（modernization）の重要性を説く（Larson, 1977, p.xiii）。現代化とは，「科学の進歩や認知された合理性，工業化社会における分業による進歩的な区別や合理化」（Larson, 1977, p.xiii）などである。そこで，Larson (1977) はこの現代化された社会として，英米のプロフェッション，その中でも医業と技術業について取り上げた。しかし，同じように工業化を果たした他の国について比較対象としていない。

② Abbott (1988)

Abbott (1988) によると，プロフェッションとその業務との結びつきのことを管轄権（jurisdiction）としている（p.20）。管轄権とは排他的な主張をすることであり，これはプロフェッションの組織内外に影響を及ぼす（Abbott, 1988, p.34）。

まずプロフェッション組織内の例として医業を挙げると、この領域では医師を頂点として看護師などのプロフェッションが存在する。医師と看護師で比較するならば、看護師の方が患者と接することが多いだろう。しかし、看護師は医師の承諾と指示なくしては患者に何をすることも許されない。ここに、医業における階層的な構造を見ることができる。「プロフェッション内部でのステイタスは、当該組織における専門的知識への関与する程度によって決められている」(Abbott, 1988, p.118)。すなわち、「より高いステイタスを求めるプロフェッショナルが第一線の活動からできるだけ手を引き、『純粋な』領域へ引きこもろうとする傾向がある」(長尾, 1995, 131 頁)と考えているのである。

上記の例は同一の領域における管轄権の問題であるが、他の領域における管轄権の割り当ての問題もある。Abbott (1988) は、イギリスにおける会計の領域がその成功の典型例だと指摘している (p.26)。「破産関係業務に始まり、監査業務に至るまで、さらに原価計算や『マネジメントサービス』にまで拡張した会計分野における管轄権の発展と変化は、プロフェッションの歴史を決定づけている」(Abbott, 1988, p.26)。会計の領域では、利益を明確化するために法律家と衝突し、ビジネスサービスの管轄権をめぐるには法律家や銀行と衝突してきた (Abbott, 1988, p.26)。このことから、「(会計の領域においては)プロフェッショナルリゼーションについて、単一的にイメージされてきた以上のものが存在する」(Abbott, 1988, p.26, 括弧内は筆者挿入)と述べている。この会計プロフェッショナルリゼーションについての詳細は、後に Macdonald (1995) によって分析されており、次節で取り上げたい。

ここで、Abbott (1988) と既存の研究との大きな相違点を挙げておこう。Carr-Saunders and Wilson (1933) に始まったプロフェッション研究は、ほとんどがアングロ・アメリカン社会を中心に論じられてきた。アングロ・アメリカン型と対峙するのが、大陸ヨーロッパ型である。大陸諸国では国家主導で職業の形成発展がなされた (長尾, 1995, iii 頁)。従って、自発的集団とも捉えられる英米圏のプロフェッショナルリゼーションの説明を、単純に大陸諸国にも置き換えて説明することは短絡的である。この点、Abbott (1988) は既存の研究において取り扱われた国や職業に偏りがあることを指摘し (pp.3-9)、フランスなども含めて比較研究を展開している。

第二節 会計プロフェッショナルリゼーションに関する先行研究

職業社会学で展開されたプロフェッション理論は、その後、会計分野でも発展するようになる。1990 年代初めを中心に、「伝統的な会計史研究が、『新会計史』にある意味劣っている」(Boyns and Edwards, 2000, p.151) かのよう論じられ、会計プロフェッションの発展過程の研究についても「伝統的」会計学を批判する動きが見られた (金森, 2010, 177 頁)。この『新会計史』は、いわゆる『批判的な会計史』を作り出してきた多数の方法論を含んでいる (Boyns

and Edwards, 2000, p.151)。つまり、「新会計史」は批判的な研究方法であり、職業社会学を採用するにあたっては批判的アプローチをそのまま会計プロフェッションにあてはめて論じられたのである。

Macdonald (1995) は、Larson (1977) が唱えたプロフェッショナル・プロジェクトを会計プロフェッションのケースに当てはめ、イギリスの会計士が批判的アプローチに基づくプロフェッショナルリゼーションの典型例であるとして詳細に検討した。以下、Macdonald (1995) に基づいて会計プロフェッショナルリゼーションの研究を概観する。

(1) 職業団体

Macdonald (1995) は、次のように Larson (1977) の言葉を引用することから始めている。

ある特定の人々の集団は、社会的分業における境界を線引きする交渉をし、それに対する支配を確立しようとした。(Larson, 1977, p.xii)

イギリスにおける会計職業団体の最初は、1853年にスコットランドにてエディンバラ会計士協会 (Society of Accountants in Edinburgh) が設立されたことによる。このエディンバラ会計士協会は、スコットランド破産法の改訂作業の最中に設立されている (友岡, 2005, 14-15 頁)。

当時のスコットランドにおける会計士の主要業務は破産関係であった (Kedslie, 1990, pp.4-5 など)。そして、破産関係業務において会計士は高いシェアを有していた (表 2-3)。1831年制定の破産法の中で「Accountant」という文言が初めて記載されて以降、破産関係業務の適任者として会計士がリスト化されるようになっていた (Macdonald, 1995, p.40)。表 2-3 の報酬全体のうち 78% が会計士に支払われていたというデータからも、破産関係業務が会計士にとっていかに重要な業務であったのか想像できる。しかし、1853年の破産法改正案において、仲介業者 (しばしば会計士が請け負っていた) が条文から撤廃される動きが出てきた (Kedslie, 1990, p.8)。エディンバラの会計士は協会を設立し、協会メンバーは団結して破産法改正に立ち向かった。協会メンバーは、スコットランドにおける破産による財産の 6 分の 5 が会計士によって管理、処理されたことを証明し、結果として期待した効果を得たのである (Kedslie, 1990, p.8)。

「19世紀半ば頃には経済活動の成長や法整備に伴い、多くのスキルや専門的知識が必要となってきた。また、それを持ち合わせている実務家による独占化が見られるようになった」 (Macdonald, 1995, p.41) とあるように、エディンバラの会計士は破産関係業務に必要とされる会計知識を持っていることから、破産関係業務に携わってほしいという利己主義で会計士協会を設立したと批判的に捉えることもできるのである。

表2-3：仮差し押さえ件数と管財人に対する報酬のシェア（1851年）
（単位：％）

	件数	報酬
会計士：	55	78
のちに勅許会計士となった会計士	38	63
その他の会計士	17	15
弁護士	13	8
金融専門家	5	3
その他	27	11

（出所）Kedslie, 1990, p.5, Table1. 和訳は友岡, 2005, 9頁, 表2。

エディンバラを皮切りに、その後グラスゴウ¹²⁾やアバディーンでも会計士協会の設立は続く。イギリスで1920年頃までに設立された会計士協会は表2-4のとおりである。

表2-4：イギリスにおける会計士協会（団体）の設立状況（1853年～1919年）

設立年	名称
1853年	エディンバラ会計士協会 グラスゴウ会計士協会（後に、グラスゴウ会計士保険数理士協会）
1866年	アバディーン会計士協会
1870年	リヴァプール会計士法人協会 ロンドン会計士協会
1871年	会計士マンチェスター協会
1872年	イングランド会計士協会
1877年	会計士シェフィールド協会
1880年	イングランド・アンド・ウェイルズ勅許会計士協会（ICAEW） 会計士スコットランド協会
1885年	会計士監査人協会 地方自治体収入役会計士協会
1888年	アイルランド勅許会計士協会
1891年	社団法人会計士社
1903年	認可公共会計士協会
1904年	会計士ロンドン協会
1905年	会計士中央協会
1919年	原価会計士協会（後に、原価会計士工場会計士協会）

（出所）友岡, 2005, p.145, 表1 ‘団体の設立’ より一部抜粋。

（2）プロフェッショナル・プロジェクトを始める

既述のように、Macdonald (1995) は、Larson (1977) によって提唱されたプロフェッショナル・プロジェクトの概念に当てはまる典型例として、会計プロフェッションの事例を取り上げた。プロフェッショナル・プロジェクトへの第一段階は、正式な職業団体を設立することで

12) Kedslie (1990) は、エディンバラとグラスゴウの会計士協会それぞれの設立背景や囲い込み政策について相違点を比較検討している。グラスゴウでもエディンバラ同様、設立当初は破産法改正が第一の関心事であった (pp.9-11)。

ある (Macdonald, 1995, p.44)。エディンバラでは破産法改正の動きを受けて、第一段階としての会計士協会が設立された。そして、その創立者たちはプロフェッショナル・プロジェクトに着手していくことになる。

しかし、まず創立者たちは一つのジレンマに陥る。入会するメンバーの要件についてである。入会要件を緩和するとメンバーの質が落ちる。入会に制限をかけすぎると、競合する団体が設立されてしまう (Macdonald, 1995, pp.41-42)。結果として、入会要件を明確にすることで排他的なクラブを設立したようなものになってしまった (Macdonald, 1995, p.42)。つまり、この協会の創立者の大半が中産階級以上であったことから、協会設立に際し、メンバーの人選をしていたと考えられるのである (Macdonald, 1995, p.42)。その人選は、良い階級に属しているか、有能な資格を備えているかで判断された (Macdonald, 1995, p.42)。というのは、創立者たちは地主階級とつながりを持っている人たちであり、大半が弁護士でもあったからである (Macdonald, 1995, p.42)。

表 2-5 は、それぞれの会計士協会が勅許を申請する段階において、申請書内で主張したアピールポイントとそのアピール回数を示したものである。各会計士協会が勅許を獲得できたのは、エディンバラが 1854 年、グラスゴウが 1855 年、アバディーンは 1867 年と、設立翌年ないしは二年以内である¹³⁾。このことから、表 2-5 の申請書内での言及が、それぞれの会計士協会の設立当初における主張であると判断しうる。表 2-5 を見ると、スコットランドの会計士は会計のスキルを持ち合わせていることよりも、法律家とのつながりがあることを主張しているのがわかる。そして、法律家は既に高い社会的地位にあった¹⁴⁾。従って、創立メンバーは法律家同様の社会的信用を得ることができたのである。

表 2-5: 勅許の申請書の内容

(単位: 回)

	エディンバラ	グラスゴウ	アバディーン
司法との関係	13	10	9
プロフェッションとしての信用	4	6	3
会計のスキル	2	4	1
業務の重要性	4		3
高等な職業教育の重要性	1	1	1
団体結成の意義	統一性	1	1
	資格	1	1
	公益	1	1

(出所) Macdonald, 1984, p.185, Table5 'Factors mentioned in the petitions for charters of the Privy Council'. 和訳は友岡, 2005, 146 頁を参照。

13) それぞれの会計士協会は設立後、エディンバラは 21 ヶ月後、グラスゴウは 16 ヶ月後、アバディーンは 11 ヶ月後に勅許を得ている (Macdonald, 1984, p.180)。

14) 「リーガルプロフェッションは貴族との関係が深く、そのことによって社会的地位を高めたと言われている」 (Macdonald, 1984, p.182)。会計プロフェッションはリーガルプロフェッションを真似して協会を設立することによって、社会的地位を高めることができたとも考えられる (Macdonald, 1984, p.182)。

創立者が上流階級とのつながりを持ったことは、その後の協会入会者にも影響を及ぼすことになる。つまり、その後に入会するメンバーは良いコネクションを持っていなかったとしても、その身分が保証されるようになった (Macdonald, 1995, p.42)。以降の入会希望者には試験に合格することや教育訓練を受けることが課された。しかし、女性には受験資格を認めなかった (Macdonald, 1995, p.42)。伝統的にヨーロッパでは女性は下位に位置付けられており、プロフェッションは男性でなければならないという前提があったと考えられる (West, 1996, p.20)。女性に入会許可を与えると、協会メンバー全体の地位が下がったと考えられかねない。かくして、会計士より下位と位置付けられた会計事務職が女性の仕事となり、会計士は男性の職業として作り上げられたのである (Kirkham and Loft, 1993, pp.270-329)。

プロフェッショナル・プロジェクトを着手するにあたって、会計士は高い社会的地位や身分を自ら作り上げることに注力した。そのために、スコットランドの会計士が勅許を申請するという文書の形で試みたのに対し、イングランドの会計士は別の方法でもその地位の確立を試みる。Macdonald (1995) はイングランド・アンド・ウェールズ勅許会計士協会 (Institute of Chartered Accountants in England and Wales : ICAEW) を例に挙げ、ロンドン市中に豪華な建築物を建造することで、世間にその地位の高さを認知させようとしたと指摘している (pp.47-48)。一方、アメリカの会計士は場所の利便性にはこだわったが、建築物の外装、内装で地位の高さをアピールしようとはしなかった (Macdonald, 1995, p.48)。このように、プロフェッショナル・プロジェクトを進めるにあたっての第一段階である職業団体の設立はイギリスの会計士のみならずアメリカの会計士にも該当するが、それぞれのプロジェクトをより細かく分析すると国や地域ごとにその違いが出てくるはずである。

以降、プロフェッショナル・プロジェクトを成功させるためにプロフェッションが行う活動を、Macdonald (1995) に従って、「生産者を生産する」、「プロフェッションの統合・管轄権・国家からの承認」、「専門的知識」という三つのキーワードに分類して紹介する。

(3) 資格 : 「生産者を生産する」

Larson (1977) による「生産者を生産する」という概念を Macdonald (1995) は会計プロフェッションの場合に当てはめ、以下のように論じている。

既述のとおり、スコットランドの会計士は協会設立後、短期間で勅許を得ることに成功した。イングランドでも 1880 年にいくつかの組織を統合して設立された ICAEW は、同じ年に勅許を得ている。協会に勅許が附与されるには、教育訓練システムと資格制度が確立していることが条件となる (Macdonald, 1995, p.45)。協会はそれぞれ試験制度と年季奉公制度を整えた。しかし、女性が受験資格から排除されていたのみならず、年季奉公制度においても限られ

た者しか受けることができないような仕組みになっていた。例えば、エディンバラ会計士協会もグラスゴウ会計士保険数理士協会も、年季奉公を開始するためには予備試験に合格し(友岡, 2005, 166-168頁), 奉公先の事務所に高額な謝金を払う必要があった(友岡, 2005, 173-175頁)。すなわち, 労働者階級の出身者にはこの謝金を納めるほどの余力はなく, 限られた階級の者だけにしか会計士としての門戸が開かれていなかった。これは, 会計士がプロフェッションの一員として上流階級に位置付けられることを維持するために, 低階層の者を排除することによって, Larson (1977) が述べた「伝統的な特権」を求めていたと解釈できる(表2-2参照)。

教育を受けている者は上流階級に位置付けられることの正当性を主張し, さらに, 勅許を得ることで合法的に市場を独占した会計士は高額な報酬を要求することによって, その地位をより一層高めようとした(Macdonald, 1995, pp.45-46)。高額な報酬を得ることが高い地位の象徴ともいえる状況から, Macdonald (1995) は, 会計士は「伝統的な特権」のみならず, 「現代的な特権」(表2-2参照)をも手に入れることができたと述べている(p.46)。「生産者を生産し, 彼らが認知され, 正当化されるということは, あらゆる手段を用いて職業としての確立と支配を試みるということなのである」(Macdonald, 1995, p.47, 太字は原文のまま)。

一方, アメリカでは非伝統的な状況が見られたようである。というのは, 1910年には10名の女性会計士が存在したという事実があり, イギリスよりも女性に門戸が開かれていたということになる(Macdonald, 1995, p.46)。また, 会計専門職のための大学内教育制度の確立が, 会計士協会設立より先行していたことも異なっている。1883年, ペンシルベニア大学にて最初のアカウンティングコースが設置されているが, アメリカ公会計士協会(American Association of Public Accountants : AAPA)が設立されたのは1887年であった(Macdonald, 1995, p.46)。

「職業団体の設立段階におけるプロフェッショナル・プロジェクトはイギリスもアメリカも同じような要素をもっているが, プロジェクトの展開については文化的な影響を受けてか, 明らかに差異が見られる」(Macdonald, 1995, p.47)。

(4) プロフェッションの統合・管轄権・国家からの承認

次にMacdonald (1995) は, Abbott (1988) によって唱えられた「管轄権」という視角からも会計プロフェッションを分析する。

「プロフェッショナル団体が国家からの承認を得ようと努力するならば, プロフェッションの統合は欠かせないと一般的には考えられている」(Macdonald, 1995, p.48)。しかし, 既述のように, 初期のイギリスにおける会計士協会は乱立状態にあった(表2-4)。友岡・小林〔訳〕(2006)では, 乱立理由を①主要な都市ごとに会計士団体が設けられたこと, ②ある団体から排除された者同士が自らの団体を新たに設立したこと, ③会計士業の中での専門分化により,

専門特化した団体の設立が見られたことと説明されている (34-36 頁)。イングランドを例に挙げると、ICAEW 設立メンバーの人選方法は能力による判別ではなかった。そして、ICAEW では不適格とされた者同士が 1885 年に会計士監査人協会 (Incorporated Society of Accountants and Auditors) を設立しているのである。「この団体は ICAEW から決して圧力をかけられていたわけではないが、低いレベルの業務にしかありつかなかった」(Macdonald, 1995, p.49)。要するに、勅許団体かそうでないかで、得られる業務が違ったということである。1957 年に他の協会と統合するまで、会計士監査人協会は勅許団体と同等レベルの業務に就くことができなかった (Macdonald, 1995, p.49)。但し、会計プロフェッション台頭の初期段階におけるこのような小規模協会の存在が、巨大な ICAEW の進歩を促したのも事実なのである (Macdonald, 1995, p.49)。

Larson (1977) に従えば、会計士は会計の専門的知識やスキルと引き換えに社会的地位や経済的報酬を獲得し、会計サービス市場を独占することがプロフェッショナル・プロジェクトの目標となる。イギリスにおいて、プロフェッションが合法的に職業独占化を達成するには二つのステップがあると考えられている (Macdonald, 1985, p.117)。一つ目は、勅許団体になることである (Macdonald, 1985, p.117)。二つ目は、職業登録制度の確立である (Macdonald, 1985, p.117)。そこで、イギリスの会計士は業務の管轄権を主張するために、職業登録の法定化を図ろうとした (Macdonald, 1995, p.49)。「1905 年時点で、公開会社の約 95% を勅許会計士が監査していたが、まだ他の者に監査業務をされる可能性があった」(Macdonald, 1995, p.49)。さらに、監査業務以外の業務においても弁護士や銀行によってなされる可能性もあった。しかし、当時のレッセ・フェール (laissez faire) の考え方の下、独占化を浸透させるのは難しかったようである。会計士業務の管轄権を法制化するには、実に長い時間を要することになる (Macdonald, 1985, p.122)。

会計士の職業登録の制度化が進まなかった理由も多様である。理由の一つとして、スコットランドとイングランドとの考え方の違いにあると考えられる。スコットランド側はスコットランドの法律はスコットランドにおいてのみ効力を有すると考えていたのに対し、イングランド側は企業や商業に関連する法律は両方で効力を有すると考えていた (Macdonald, 1985, p.125)。法律の効力範囲は、それぞれの会計士による業務可能域に影響を及ぼす。1909 年まで、両者の主張は歩み寄ることがなかった (Macdonald, 1985, p.125)。さらに、もっと単純な理由として、そもそも勅許で守られていれば職業登録制度を確立する必要性がなかったとも考えられる (Macdonald, 1985, p.125)。

いずれにしても、「イギリスの会計士が**組織化されたプロフェッションとして、サービス提供の独占化を果たすのに 100 年以上の年月が必要であった**」(Macdonald, 1995, p.50, 太字は原文のまま)。1957 年の ICAEW への統合を契機に、法定監査は勅許会計士によってなされな

ければならないと会社法などによって明文化されたが、医師や弁護士で実施されているような登録制度による業務独占化には結局至らなかった（Macdonald, 1995, p.50）。

（5）専門的知識

「専門的知識」もプロフェッショナルリゼーション研究におけるキーワードである。

会計の専門的知識やスキルとは、簿記のみならず、法務、税務に関する知識など広範囲に及ぶ。会計士は知識ベースだけの職業ではないが、他方で会計の専門的知識の範囲として境界線を引くこともできないため、会計プロフェッション自体を定義することが難しいと Macdonald (1995) は指摘する (pp.50-51)。例えば、法律家や銀行が会計の専門的知識を使って、それぞれの業務をこなすこともあるだろう。会計の専門的知識が会計士だけのものではないという状況は、前述した会計士の管轄権問題の解決を遅らせた原因の一つでもある (Macdonald, 1995, pp.50-51)。だからこそ、勅許会計士は彼らだけの独占業務を作り上げることに固執したのである (Macdonald, 1995, p.51)。

しかし、第一次世界大戦後の企業の大規模化や複雑化により、原理原則といわれる会計の基礎知識だけではなく、複雑化した実務に対応させる応用力が要求されるようになってきた (Macdonald, 1995, pp.51-52)。それに伴って、複雑化した業務をこなすことができるのは原理原則を理解し、実務へ応用できる会計士だけとなり (Macdonald, 1995, p.51)、会計士はその業務の管轄権の主張が国家によって認められたのである。

会計プロフェッションの持つ「知識」に注目したのは West (1996) である。West (1996) は、「専門的知識が持つ役割について、プロフェッショナルリゼーションの研究者は特別な注意を払ってきた」(p.17) と指摘する。「知識」という言葉は、プロフェッショナルリゼーションを説明する上で二つの役割を果たしてきたと West (1996) は述べている。一つは、ある団体における従事者を団結させるような作用をもたらした (West, 1996, p.15)、もう一つは国家に認められた特権を獲得しようと望む場合の職業的な権力としての役割を持った (West, 1996, p.15)。要するに、プロフェッションは専門的知識を拠り所にして、生産者を生産してきたし、プロフェッションとしての業務の管轄権を主張してきたと説明できる。このように考えると、「知識」はプロフェッショナルリゼーションにおける「コアとなる特徴」として結論づけられる (West, 1996, p.16)。

しかしながら、『『会計の知識』ともいべき会計士業務のテクニカルな部分はずっと疑問視されてきたし、混乱を招くとまで言われてきた」(West, 1996, p.16)。つまり、「会計知識が一致していないにもかかわらず、会計プロフェッショナルリゼーションが達成されたという会計実務への批判である」(West, 1996, p.16)。West (1996) は、会計の知識という概念は、それによってプロフェッショナルリゼーションをもたらしたというよりも、むしろプロフェッショナルリゼー

ションのために利用されたと指摘するのである¹⁵⁾。

お わ り に

会計プロフェッショナルリゼーションが盛んに論じられるようになったのは、Larson (1977) が提唱したプロフェッショナル・プロジェクトをはじめ、プロフェッション研究における批判的アプローチの影響を受けてのことである。従って、その論法は批判的である。イギリスに端を発する会計プロフェッションはその後国境を越えてそれぞれの地域で活躍していく。しかし、会計プロフェッショナルリゼーションは研究対象にする国、時代によって異なるものであり、一様に説明することは不可能である。しかし、本稿で概観した研究に共通してみられるのは、プロフェッションがその専門的特性ゆえにではなく、社会的優位を勝ち取るための「闘い」(千代田, 1988) を通じて現在の地位を獲得したという観点である。

今後の課題として、日本の会計プロフェッショナルリゼーションについて、先行研究で取り上げられた国々との比較をするとともに、本稿で検討したキーワードを軸に検討していきたい。

参考文献

- Abbott, Andrew (1988) *The System of Professions : An Essay on the Division of Expert Labor*, University of Chicago Press.
- Boyns, Trevor and Edwards, John Richard (2000) 'Pluralistic Approaches to Knowing More : A Comment on Hoskin and Macve', *Accounting Historians Journal*, 27 (1), pp.151-158.
- Carr-Saunders, A.M. and Wilson, P.A. (1933) *The Professions*, Oxford University Press.
- Edwards, John Richard (2000a) 'Introduction', in Edwards, J.R. (ed.) *The History of Accounting : Critical Perspectives on Business and Management, Vol.I, Method and Theory*, Routledge, pp.xli-xlvii.
- Edwards, John Richard (ed.) (2000b) *The History of Accounting : Critical Perspectives on Business and Management, Vol.IV, Professionalisation of Accounting*, Routledge.
- Edwards, John Richard (2001) 'Accounting Regulation and the Professionalization Process : An Historical Essay Concerning the Significance of P.H.Abbott', *Critical Perspectives on Accounting*, 12, pp.675-696.
- Kedslie, Moyra J.M. (1990) 'Mutual Self Interest - A Unifying Force ; The Dominance of Societal

15) プロフェッションが扱う「知識」について、長尾 (1995) は次のように説明する。「第一に、それは抽象的原理へ組織化されていなければならない。そしてこの原理は職業活動上の具体的問題の解決に適用可能でなければならない。第二に、当該職業グループ自身が、かかる知識の統一体に対して独立的な主体的立場を占めていることである。すなわち、プロフェッションはこの知識を持つのみならず、その創造を助け、その正当性をめぐる論争における最終的な裁決者であり、かつこの知識への接近をコントロールする立場にいなければならない。第三に、かかる特別の知識体系の存在とその有用性を『公衆もしくは関係を有する人々』が信じていなければならないということである」(長尾, 1995, 53 頁)。さらに、長尾 (1995) は「プロフェッション化の過程にあるとみなされる多くの職業は、その職業上の課題に関わる知識の一般的体系を形成しえていないがゆえに、……プロフェッショナル・ステイタスの要求を満たしていないのである」(54 頁) と続けている。

- Closure over Social Background in the Early Professional Accounting Bodies', *Accounting Historians Journal*, 17 (2), pp.1-19.
- Kirkham, Linda M. and Loft, Anne (1993) 'Gender and the Construction of the Professional Accountant', *Accounting, Organizations and Society*, 18(6), pp.507-558, reprinted in Edwards (ed.) (2000b), pp.270-343.
- Larson, Magali Sarfatti (1977) *The Rise of Professionalism : A Sociological Analysis*, University of California Press.
- Macdonald, Keith M. (1984) 'Professional Formation : The Case of Scottish Accountants', *British Journal of Sociology*, 35 (2), pp.174-189.
- Macdonald, Keith M. (1985) 'Social Closure and Occupational Registration', *Sociology*, 19 (4), pp.541-556, reprinted in Edwards (ed.) (2000b), pp.113-132.
- Macdonald, Keith M. (1995) 'A Professional Project - The Case of Accountancy', chapter7 in Macdonald, K.M., *The Sociology of the Professions*, Sage, reprinted in Edwards (ed.) (2000b), pp.36-59.
- McClelland, Charles E. (1991) *The German experience of professionalization : Modern learned professions and their organizations from the early nineteenth century to the Hitler era*, Cambridge University Press.
- Millerson, Geoffrey (1964) *The Qualifying Associations : A Study in Professionalization*, Routledge and Kegan Paul.
- Parsons, Talcott (1939) 'The Professions and Social Structure', *Social Forces*, 17, pp.457-467, reprinted in Parsons (1964), pp.34-49.
- Parsons, Talcott (1964) *Essays in Sociological Theory, Revised Edition*, Free Press.
- Poullaos, Chris (1994) *Making the Australian Chartered Accountant*, Garland Publishing.
- Previts, Gary John and Sheldahl, Terry k. (1977) 'Accounting and "Countinghouses" : An Analysis and Commentary', *Abacus*, 13 (1), pp.52-59, reprinted in Edwards (ed.) (2000b), pp.1-10.
- West, Brian P. (1996) 'The Professionalisation of Accounting : A Review of Recent Historical Research and Its Implications', *Accounting History*, 1 (1), pp.77-102, reprinted in Edwards (ed.) (2000b), pp.11-35.
- Wilensky, Harold L. (1964) 'The Professionalization of Everyone ?', *American journal of sociology*, 70 (2), pp.137-158.
- Willmott, Hugh (1986) 'Organising the Profession : A Theoretical and Historical Examination of the Development of the Major Accountancy Bodies in the U.K.', *Accounting, Organizations and Society*, 11 (6), pp.555-580, reprinted in Edwards (ed.) (2000b), pp.233-269.
- 石村善助 (1969) 『現代のプロフェッション』至誠堂。
- 金森絵里 (2010) 「会計におけるプロフェッショナルリゼーション研究の展開と日本的会計研究への示唆」『立命館経営学』第48巻第5号, 177 - 191 頁。
- 竹内洋 (1971) 「専門職の社会学-専門職の概念-」『ソシオロジ』第16巻第3号, 45 - 66 頁。
- 千代田邦夫 (1988) 『公認会計士-あるプロフェッショナル100年の闘い』文理閣。
- 千代田邦夫 (2006) 『現代会計監査論』税務経理協会。
- 友岡賛 (2005) 『会計プロフェッションの発展』有斐閣。
- 友岡賛・小林麻衣子〔訳〕 (2006) 『会計士の歴史』慶應義塾大学出版会。
- 長尾周也 (1995) 『プロフェッショナルと組織』大阪府立大学経済研究叢書。
- 八田進二 (2004) 『公認会計士倫理読本-国際的な信認を得るための鍵-』財経詳報社。
- 森岡清美・他〔編〕 (2002) 『新社会学辞典』有斐閣。

